

「塾と塾、塾と塾と学校手を取り合って」

東日本大震災で被災した子供たちの勉強を支援しようと、NPOの仲立ちで学校も協力する新たな学習塾が宮城県女川町で始まった。塾の名前は「女川向学館」。公立小学校の空き教室を利用し、町内の塾講師らが、町の小中学生全体の3分の1にあたる約2100人を指導している。

向学館は、高台で津波の被害をまぬがれた町立女川第一小の1階の空き教室を利用。校舎は今も避難所として使われており、この学校の児童は女川第二小に移って授業を受けている。

首都圏を中心に、高校生へのキャリア教育を展開しているNPO法人「カタリバ」（東京都杉並区）が発案し、8月上旬に本格的にスタート。夕方から夜にかけて、週6回開講。震災以前は別の塾に所属していた講師13人

無料学習支援の場 開設

女川・NPO仲立ち 公立小で

小中学生 3分の1参加

が、学校から学習進度を聞いて、当面は復習を重点に指導する。

対象は町立小中学校に通う児童・生徒で当面は無料。中学生は英語と数学が中心で、小学生は算数と国語の2教科だ。

町教委によると町立小中学校の児童・生徒は8月1日現在で590人で、向学館には3分の1以上が参加している。まだ町内にはがれきが残っており、送迎バスを運行する。運営するカタリバのメンバー、鶴賀康久さ

ん(30)は「子供は仮設住宅や避難所に帰っても学習に集中しづらい。塾の多くが津波で流され、講師は仕事を失った。こうした問題を解決したかった」と説明。生徒からは「学校の勉強だけでは受験に間に合わないのだから(中3女子)」「少人数で質問しやすい(中3男子)と好評だ。

遠藤定治・町教育長は「学校と塾が連携して子供の学習の機会を保障し、向学の志を高められれば」と期待する。

講師の一人、山内哲哉さん(39)は「塾と塾、塾と学校が手を取り合うのは珍しい。復興に少しでも役立ちたい」と話している。

運営費は月額3000万円程度で、カタリバ

などが企業や学校法人から寄せられる寄付で賄っている。問い合わせはカタリバ(03・53327・5667)へ。



英語の問題集を解く中学3年生たち。「女川向学館」では塾講師やボランティアが子供たちの指導にあたる。宮城県女川町の町立女川第一小学校で